

# 実践と知識を結びつける試み 保育方法演習Aの授業計画

## A Proposal of a Combination of Plan of Knowledge and Practice for Childcare Lesson

(2017年3月31日受理)

大橋 美佐子

Misako Ohashi

Key words : 実践, 知識, 授業計画

### 要 旨

本研究は平成28年度に保育実習に参加した学生にアンケートをとり、その結果を基に保育現場での実践と大学に戻って授業を再度受けるときに、どのように結びつくのかということを検討した。調査の結果から、問の「準備しておけばよかったと後悔したことがありますか」という項目を中心に分析した。一番多い回答は「手遊び・遊び」を知っておけばよかったや「子どもの発達過程」の理解をしておけばよかった。さらに、「絵本やピアノ」といった実践的な事柄を挙げた学生が多くいた。その結果が授業に反映するものは何かを検討した結果、模擬授業の計画・立案・実施・評価・反省を取り入れることだと考えられた。この授業計画で、実施し今後どのような変容があるのかを検討する。

### I. はじめに

現在、保育に関するさまざまな課題がある。保育士不足に始まり、保育所へ預けたくても預けられない子どもたち、いわゆる待機児童の増加、少子化、虐待、DVなどあげていけばきりがなほどの課題が山積している。そのような複雑な課題のある保育現場に学生を送り出す養成校としては、様々な課題の所在を討議する授業を展開するなど、今まで以上の教員の努力が必要となってきた。

2015年のデータで、少子化のあおりを受け、私立4年制大学のうち定員割れをおこした学校が46%、(全国587校のうち578校が回答。うち、定員割れは265校)であったと勝間田(2015)は報告している。また、18歳人口の減少や高等教育機関への進学者の増加などに伴い、すべての18歳が高等教育機関に入学できる「大学全入時代」が到来した場合、保育者の質の低下問題が深刻になり、二年間の保育者養成校での質の高い保育者養成は困難に

なると富田(2005)は危惧している。以上のように、保育現場自体の課題および大学としての課題が多くある中で、大学の教員として保育者としての資質を十分に育てた上で保育現場に送り出す、という大きな使命が課せられているといっても過言ではない。本学科の教員は前述したような課題に対して、まず短大であるため2年間で保育の課題に対する対応がある程度できる学生の養成を行わなければならない。そのためには、現在ある教科目の充実した授業の展開を図るために本学科では、毎年保育実習の終了後、実習に参加した学生に対してアンケートを取り、次年度の授業に生かしていくようにしている。保育現場で実際に実践したことを養成校に戻り、実習全般に関する反省・省察を行う。その内容は、グループ討議、自己課題に対するレポートを書くという作業を行っている。これら一連の作業を行い、その結果を基に次年度実習に参加する学年の教科に反映させていくようにしている。

## II. アンケート調査の概要

### 1. 調査の目的

本調査は、本学保育学科学生2年生が履修する保育実習に参加した者全員を対象に記述式のアンケート調査分析を行い、次年度の学生に生かしていくとともに、授業改善の基にすることを目的とする。

### 2. 調査の概要

調査日：保育実習終了後平成28年6月中旬の授業内

調査方法：質問紙・記述式アンケート

調査対象：保育実習B・C履修者 119名

## III. アンケートの結果・考察

### 1. アンケート質問項目

以下の項目で記述式のアンケートを行った。

問1 今回の実習で一番心に残っているエピソードを書いてください。

問2 保育士から学んだことを書いてください。

問3 子どもから学んだことを書いてください。

問4 自分自身が実習の前後で変化したことは何か。

問5 準備しておけばよかったと後悔したことがありますか。

問6 幼稚園教育実習に向けて、これからしておかなければならないと思うことは何か。

問7 その他、実習に関することを何でも書いてください。

### 2. アンケート結果と考察

このアンケート結果で今回は、授業改善につながる問5を用いた「実習に準備しておけばよかったと思ったこと」という質問を中心に分析を行った。結果では、実際に子どもの前でする「手遊び・遊びを知っておけばよかった」や「子どもの発達過程の理解をしておけばよかった」さらに、「絵本やピアノ」といった実践的な事柄を挙げた学生が多くいた。また、少数ではあるが「子どもと共通の話題」を知っておくことが必要であると回答した学生もいた。これらのことを反映し、授業の計画を立てて

いった。

アンケートで「準備しておけばよかったと後悔したことは何か」という質問に対して、表1に示した通り、「手遊びをもっと知っておけばよかった」という回答が「新しい手遊びを調べておけばよかった」も含めると53ポイントあった。ポイントとしたのは、1人が複数の回答をしたのでそのカウントにした。手遊びについては、音楽系の授業でも実施しているが、実習先に行き、子

表1 実習に準備しておけばよかったと思ったこと

	内 容	ポイント数
1	手遊びをもっと知っておけばよかった・新しい手遊びを調べておけばよかった	53
2	あそびを知っておけばよかった(室内・集団・ふれあい)	28
3	発達過程を理解しておく・発達過程を理解したうえであそびを考える	24
4	絵本をもっと知っておけばよかった・工夫して読めるようにしておけばよかった	20
5	ピアノのレパートリーを増やしておく・練習をしておけばよかった	18
6	おもちゃはできるだけ多く作っておけばよかった	18
7	指導案が書けるように・事前を書いておけば・練習をしておけばよかった	13
8	導入に使えるもの・視覚に訴えるものを作っておけばよかった	13
9	子どもたちに見せるものを作っておけばよかった(ペープサート・パネルシアターなど)	12
10	歌を知っておけばよかった(季節の歌・わらべうた)	7
11	話す練習をしておけばよかった・説明の仕方を考えておけばよかった	3
12	子どもと共通の話題を調べておけばよかった(T.V・キャラクターなど)	2
13	素話や昔話を覚えておく	1
14	流行りのダンスを覚えておく	1
15	教材研究	1
16	折り紙のおり方	1
17	導入の方法	1
18	動物の絵が描けるように	1
19	エプロンにつける名札をもう一つ作っておけばよかった	1

もの前で実施するとなると、手遊びが完全に最後までできなければ意味がなく、うろ覚えで実施したのでは子どもたちは楽しむことができない。記述の中には「手遊びを途中までは知っているが完全にできるものが少なかった」、「緊張のあまり頭が真っ白になりうまくできなかった」という記述があり、初めての實習ということで、実際の保育現場で手遊びをする場面が多くある事を知らなかったために、「手遊びをもっと知っておけばよかった」と回答したのではないかと考えられる。また、子どもから「その手遊びはしたことがあるから違うのがいい」と言われた学生もあり、やはり新しい手遊びも習得していく必要があったと後悔したものと思われる。

次に多かったものは「あそびを知っておけばよかった」という回答が28ポイントある。この回答については、授業の中であそびの紹介はするものの、授業の回数には限りがあり、毎回全種類のあそびを実施するわけにはいかない。さかのぼれば、今回の實習対象者は1990年代後半に生まれた子どもたちである。その頃の日本は少子化に拍車がかかり、幼い頃から塾に通わせる家庭が増え、戸外であそばせるとけがをすると過干渉の親も増えてきた時代であると大橋ら(2008)は述べている。また、ファミコンや携帯電話の普及とともに育ってきた年代といえよう。それらのことから、学生自身が幼い頃十分に体を動かして戸外で遊びこむ経験が少ないまま大人になったのではないだろうか。しかし一方で、實習対象者は何らかの形で保育所や幼稚園に通っているという年代である。その施設においては、「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」を基に保育が行われており、様々なあそびの経験はあるはずである。したがって、体験はしたことがあるが、記憶の中にはあまり残っていないということが推察される。記述では、「あそびの指導をすることになり、自分が考えていったあそびが担当保育士から、そのあそびはしたことがないから他のあそびにしてくださいと言われたが、1つしか考えていなかったで困った」、「あそびを指導するのに考えていったあそびが、年齢に合わないから変えてと言われたが思いつかなかった」という回答があり、授業でも年齢や発達に合わせたあそびを必ず複数考えていくよう伝えていたが、それができていなかったと確認できたが、授業での伝え方を工夫しなければならぬと改めて考えさせられた。

3番目に多かったのは「発達過程を理解しておく」という回答が24ポイントであった。この項目については、毎年實習園の先生方から個人の評価票や實習日誌の指導欄に「幼児の発達を理解しましょう」と書かれている学生がいるが、養成校としても毎年工夫しながら授業を行っていることの1つである。例えば、発達過程を表にして、身体・機能・知的に分けて調べ学習をさせるが、出典を見るとほとんどの学生がインターネット検索をしており、簡単にしか表に書き込んでこないという現状がある。初めに図書館で本を参考に調べるように伝えるが、できている学生はごく一部である。

實習期間は決まっており、その中で幼児理解をしていく他ないわけであるが、授業の中で保育現場の見学に行くことも限界がある。その他DVD視聴をするなどして、視覚からの学習にも工夫しているが、その他どのような方法であれば理解できるかが教員側の今後の課題でもある。授業でよく聞いた内容は、「実際の保育現場で實習をしてみて、今まで授業で先生が説明していることが半分くらいしか理解できていなかったことがわかった。子どもを前にするとわかることがたくさんあった」という類の話である。保育現場の偉大さと、子どもの偉大さが実感できる言葉である。

表1の7番目にある「指導案が書けるようにしておけばよかった」という回答が13ポイントある。指導案については、基本的な記入方法や書き方のポイントをわかりやすく説明しているが、それぞれの実習園によって少しずつ違いがある。それらをすべて網羅した指導は不可能に近いので、基本の書き方のみの指導をしているのが現状である。指導案のそれぞれの欄には何を書くのか、文章にねじれが生じていないか、援助・配慮欄の文章の構成など普段の感想文やレポートの書き方とは違うということが理解できるように授業を進めている。

表1の8・9については、「何か視覚に訴えるものや実際の保育の中で使用できるものを作って持っていけばよかった」という意見である。これは筆者の授業以外の教科目にも関連するため、授業内で作成するという事は難しい。したがって、授業外で個人的に作成する必要がある。そのためには、先輩が作成したものを展示したり作り方が載っている本を紹介したり、一部は貸し出しができるようなシステムが必要になると考えられる。

その他様々な項目が出てきているが、これらを基に次のステップに進めるよう、筆者が担当している授業で改善をするために授業計画を実施した。

### Ⅲ. 実践と知識を結びつける試みの考察

アンケートを分析した結果、筆者が担当する授業科目でほぼ網羅できると考え、授業計画を立てた。それが、次の計画案である。

#### 1. 本学科科目名 ー保育方法演習Aー

幼稚園教諭免許状取得科目のなかでは「教職に関する科目」に属し「教育課程及び指導に関する科目」の中の「教育の方法及び技術」にあたる科目である。本学科では「保育方法演習A」という科目の名称になっている。

この科目は、平成29年度から本学保育学科2年生前期に開講されている。単位は1単位、授業形態は演習である。

保育方法演習Aの【授業の概要】は保育の目標と内容をふまえ、子どもの全面発達を援助していくための指導法について、理論の観点、実践の視点から説明する。また実際に指導案を作成して模擬保育を行い、評価・反省を行うことにより具体的な保育の内容と方法を考えることを説明するとした。

#### 【授業計画】

- 第1回：保育方法とは
- 第2回：保育形態と保育方法
- 第3回：子ども理解と保育方法
- 第4回：指導計画の実際
- 第5回：遊びと環境構成
- 第6回：遊びを通した指導法
- 第7回：年齢に応じた保育方法(1)
- 第8回：年齢に応じた保育方法(2)
- 第9回：年齢に応じた保育方法(3)
- 第10回：グループ討議・発表・評価(1)
- 第11回：グループ討議・発表・評価(2)
- 第12回：グループ討議・発表・評価(3)
- 第13回：家庭・地域・小学校との連携
- 第14回：保育環境における課題
- 第15回：保育方法のまとめ

以上のように授業の予定を組み立てた。アンケートの

初めにでてきた、「手遊びをもっと知っておけばよかった」という項目は、授業計画第6回から第9回の中で実施できると考える。第6回遊びを通した指導法の中に「手遊び」を導入し、どのような場面でそれが使用できるかを学生に考えさせ、クラスの前で発表することで緊張もほぐれ、手遊びの数も知ることができるものと考えられる。アンケートの次に多かった「あそびを知っておけばよかった」については、第4回から第9回でグループ討論し、あそびを考えるために図書館で調べたり保育の流れを練習したりすることもできると考えられる。また、指導案を書くことに関しては、第7回から第9回は模擬保育を実施するため、必ず指導案を書く必要が出てくる。各自で指導案の作成をすることになるため、指導案を書き添削を受けることにより指導案が書けるようになってくるものと考えられる。さらに場合によっては、表1のその他の項目についても、模擬保育を考える段階や実施する場合に取り入れることができる項目ではないかと考えられる。

実際に保育現場で実習を終え、養成校に戻り授業を受けるときに、実習を思い出させるようなシートを作成し書いていった。また、実際に自分が保育をする中で成功した経験と失敗した経験を書き出し、グループに分かれて実際にしてみた対応から、クラス全体にその対応の方法を伝え、クラス全体で考えていくようにした。そうすると、授業を終えた後、「自分の考えだけでなく、他の人の考える方法を知ることができてよかった」や「保育の方法はいろいろあることを知ることができた」などという感想が聞かれた。

### Ⅳ. ま と め

保育の現場に実習に行くということは、机上でのみの学習よりもより具体的かつ実践的な学習であることは承知していることである。その実習をより効果的にするためには、実習を終えて養成校に戻り、実施してきた実習の振り返りを十分に行い、その一つ一つの実践を、再度知識として学ぶことに意味がある。その積み重ねこそが、卒業後の就職において実のあるものになってくるのである。現在の社会の諸問題について、対応できる学生を養成することが我々養成校教員の使命の一つでもある。今

回のアンケート調査で「実習に準備しておけばよかったと思った事」の上位には、実習が近づいてくるところに常に授業で伝えていたことのほとんどが出てきている。しておかなければならない事ができていないということは、学生たちそれぞれの理由があるに違いないが、学生の困り感や要望に耳を傾け、授業改善を考えていくことも必要ではないだろうか。すべてを学生に合わせていくということではないが、ある程度の授業改善が必要であり、実習終了後はなんらかの方法で感想や要望を聞き、次の教科目に反映させていくことが必要である。

今回保育方法演習Aの授業で、実習に参加した学生の実践と再度大学に戻り授業での知識が結びつくよう授業の計画を見直した。しかし、今までの授業の計画で実践してきたものとさほど急激な変更は必要なかった。それは、毎年の授業計画で模擬保育を取り入れている。模擬保育の計画から指導案の作成、発表、評価・反省をしていくという一連の流れは、実習の実際と同じ流れの中で実施されるものであるためだったと思われる。昨年度以上に模擬保育の中身を充実させ、今後この授業計画で実施した授業でどのように学生が変容していったかを報告していきたい。

## 参 考 文 献

- 勝間田明子 2015 教職実践演習に関する一考察—子育て支援室の環境構成に対する気づきに注目して—  
鈴鹿短期大学紀要 35, 75-84
- 大橋美佐子・谷本満江 伝承あそびに関する調査研究(1)  
—30年間における伝承あそびの意識変化— 中国学園紀要 7, 7-12 2008
- 富田昌平 保育者の専門性とメンタルヘルスに関する研究の動向 —質の高い保育者育成に向けて— 山口芸術短期大学研究紀要 第37巻 2005

